

第二十九回法華經・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー

質疑・応答

衰輪 会場からの質問等に答えながら議論していきたいと思えます。そのまえに一つ、中尾先生にお伺いしたいことがあります。教科書を作るときに必ず教科書調査官という方がいらっしやると思いますが、どのようなことをしているのか具体的なお話をいただければと思います。私も前に、大倉精神文化研究所にいた時期がありまして、教科書調査官の村尾次郎先生と時野谷滋先生のお二方が研究員としていらっしやいました。

村尾次郎先生は教科書上の有名な戦争のときの自衛や、侵略戦争に関わっていらっしやいました。また、家永三郎さんの教科書にも関わっていらっしやったと思うのですけれども、裏話を少し聞かせていただいたことがあります。教科書を作っていくときには教科書調査官という方が役割を果たしていらっしやると思えますが、具体的にどのような内容なのか、お話をいただけたらと思います。

中尾 日本の教科書というのは国定ではありませんから、一応、文部省の方に原稿を出して、それを調査官が、先ほど言いました、昭和二十七年に出しました社会科の指導要領に沿っているかどうかということを、細かく調査をなさる方なのです。日本史の方では三人いらっしやいました。それで、一応原稿を作って、こちらの方には山川の教科書があったり、あちらにはいろいろたくさんあって、そういうものとあんばいしながら原稿を作ります。原稿の読み合わせをして、「これならどうだろう」ということを考えて、それを文部省の方に出すのです。そうしますと、調査官

がそれを、長い時間かけて、細かいところまでチェックしてまいります。記述のしかたが悪いとか、改めるというときには、附箋を付けて、「どう直せ」と出てくるのです。ただ、問題は、どうして直さなきゃいけないかという理由は書いてくれないのです。「ここを直しなさい」という命令で、今はどうか分かりません。

ですから、出版社として見れば、自分のところで教科書が不採用になったときには大変な損失ですから、とにかく辞を低くして、「はい、はい」って言いながら聞いてくるのですが、それをまた執筆者の方が、「何でしつかりこれに対して反論しなかったんだ」と怒ったりするんです。三省堂の教科書をお使いになった方がおいでじゃないかと思えますけれども、家永先生が監修なさったわけですが、一期ほど不採用になりました、問題になったことがあります。そういうことで、非常に権限を持った方なのです。私どもが仕事をしていた時に当時の監査官をやっていたトップの方が、今、天皇の即位とかいうときには必ず学識経験者で意見を述べていらっしやる有名な方でございます、テレビを見てその方が姿を現しますと、昔の悪夢がよみがえる。そういうような権限を持った方です。

けれども、古いところはさておいて、近現代史は非常に難しいところがあるので、主力はその辺に置くんじゃないでしょうか。それは大変なお仕事です。立正大学の先生の中でも、地理の先生が監査官に加わっていた人が一人おられますけれども、「大変な仕事だ」と言っただけの権威を持っているものですから、教科書がパスいたしますと大変な喜びようで、一期三年ですかね、そのまま再版できますので。

ただ、ここで皆さんにお話ししておきたいことは、「教科書にこのように書いてあるから、これでいい」と思っただけなのではないのです。問題は、教師用書というのがあるのです。先生のところ配るのがあるのです。これは、一般には売っておりません。公開していいのです。私ども高等学校の教師をやっていた時には、そういうのが必ず付いてくるのです。山川教科書、先生のところにございますけれども、これの三倍ぐらいの厚さがあるものが付くのです。それで話をするのですが、その教師用書の中に、日蓮宗の所なんかは、二ページぐらい最低書いてあるのです。ですか

ら、教科書もさることながら、教科書をどのように説明して話をするかということが、また問題なのだろうと。というわけで、教科書だけでは理解が十分いくというわけではございませんので、付け加えさせていただきます。

蓑輪 中尾先生、ありがとうございます。教科書調査官の役割と、指導要領がセットになって、どのような内容でどのように教えるかがある程度決まっていることなのだと思います。その教え方については、国の意向がかなり入っていると考えていいのでしょうか。つまり、文部省としての意向みたいなものが、やっぱり入るものかどうか。ふうに言わざるをえないということでしょうか。

そうしますと、大塚先生にお聞きしたいのですが、実際にできた教科書と、それをどう教えるべきかということ、現在の日本は、どのようなことを大事にしながら作っているのか。また、どういう方針があるのかということ、もし差支えがなかったら、ご存じの範囲で結構ですので、お願いいたします。

大塚 教科書調査官の役割は中尾先生がお話しになったとおりです。教科書検定の話に限らず、昨今のニュースで話題になっていることと同じでありまして、どういうプロセスで、どういう議論が行われ、どのように決定に至ったのかという情報の公開が、日本は他国と比べると脆弱なところがあります。元々脆弱だったうえに、最近では資料が確認できない、廃棄されたなどということも起きています。昨今は教科書検定がそれほど話題にはなっていないものの、記述内容について論争が続いている部分もあります。例えば、戦争をめぐる記述などです。そういう部分が論争になったときに、どのような経緯でそうした記述になったのかということについて、確認する術を十分に担保されていないという点が、我が国の問題です。

国によって教科書検定のな仕組みの濃淡はあります。相当自由な国もありますので、日本の教科書検定の在り方が

これでもいいのかどうかということについても、そもそも議論があるところだ。

以上が制度的な話ですが、別の角度からひと言申し添えます。仏教趣味人として活動しているご縁で、ある時、京都のお寺にお招きいただき、高僧の講演を聞かせていただきました。その際、高僧のお話は冒頭、次のような口上で始まりました。「皆さん、今から私が話す内容は、半分がうそで、半分が作り話です」とおっしゃったのです（笑）。つまり一〇〇%うそか、作り話だということです。信頼のある高僧だから言うことのできる笑いを誘う掴みですが、つまり、史実は自分の目で確認できない、お釈迦様に会えるわけでもないし、日蓮聖人に会えるわけでもない、「鵜呑みにしないでくださいよ」とおっしゃっているのです。自分の頭で考えてくださいと導いているわけであり、聴衆の笑いを誘いつつ、大切なことを論じています。

史実を実際に見聞きすることはできないという現実を踏まえ、史料の重要性について付言させていただきます。さきほど教科書検定の制度的な課題を申し上げましたが、教科書は自由に何を書いてもいいわけはありません。史料に基づいて記述する必要があります。歴史学の世界では、一次史料、二次史料という言い方をしますが、日蓮聖人が直接お書きになった一次史料や、根拠の明確な一次史料に加え、その一次史料を参考に書かれた二次史料、さらには三次史料という具合に、史料は重層的に存在しています。どんどん間接的になっていきますが、それらを的確に活用することが重要です。

教科書の記述を変えていく場合、史実や史料に基づかないで自由に変えていいわけではありません。日蓮聖人はたくさんのご真蹟や文献を残しておられます。既に十分研究されているとは思いますが、更に紐解いていくことによって、日蓮聖人を象徴するお言葉とか表現について、史料に基づいて新たなものが生み出されるのであれば、何の問題もありません。そういう取り組みの重要性を改めて申し上げる次第です。

中尾 今のお話ですが、日本史で鎌倉仏教を考える場合に、やはり内容面はですね、むしろ倫理社会の方で扱うと考えられます。日蓮の外的な理解については日本史で学ぼうというような、鎌倉仏教は全部そうですが、親鸞にしても法然にしても、内容的なことは倫理社会という話が、具体的にあったことを覚えております。ただ、今、日本史と倫理社会の教科書をみると、随分記述が変わってまいりました。鎌倉新仏教という言葉の「新」を取って、鎌倉仏教と読み替えようという話を長い間進めてきたのですけれども、今、現行の教科書では「新」は取ってありますので、随分考え方が変わったなと思っております。

ただ、私どもの古い教科書の記述に対して、批判がありました。というのは、近現代の教団の大きさを記述を変えていることです。例えば浄土真宗について言うならば、浄土真宗は、東西本願寺を中心とする非常に膨大な教団です。ところが、それ以外に、高田派の専修寺だとか、いろいろ小さい教団があるのですが、それは全部目をつぶっているのみか、「それは正統ではない」という判断が示されて、これは教師用書ですけどね、書いてあったりしています。現在の教団で議論するのはおかしいだろうという問題があります。もう一つは、鎌倉新仏教の中に栄西が入っております、栄西は祖師とは違うというのが専らの批判でした。そういうことで、新しい見方で仏教史を考えていかないといけない時期になったのかなと考えます。

この間、ずっと教科書を眺めていましたら、中に一つだけ、私が今、申し上げているようなことで記述している教科書がありました。著者を見ておりましたらわれわれの仲間の一人だったことを知りまして、うれしく思ったのですが、現在の学問の水準というものと教科書の記述というものは、必ずしも並行していません。むしろ教科書の記述の方が、十年ぐらい後をついていっているのではないかというくらいはあると思うのですが、いかがですか。

高橋 実際そうですね。先ほど私の話のときでも、禅宗と鎌倉幕府の接触が早いということ、栄西の話を挙げたの

ですが、今、中尾先生がおっしゃいましたように、榮西は、禪僧であるとともに、顕密僧でもあるんですね。研究ではそっちの方が進んでいるわけですが、どうしてもそういう話は教科書に反映してこない。

反映するものもないわけではなく、例えば、ちょっと話が違ってしまいますけど、織田信長が「天下布武」という印鑑を使っていた。その天下布武というのは、「天下に武を布く」ということで、まさに武力で天下を統一しようとしていたスローガンだという形ですと説明されてきたのですが、この十年、二十年ぐらいの間に研究が進んできまして、信長が使っていた段階の「天下」というのは、日本全国ではなくて、せいぜい室町幕府の命令が行き渡っていた近畿地方レベルだろうということになりました、これは比較的早く教科書に取り入れられているんですね。今、私を持っている山川の教科書でも、「天下布武については最近こういう説がある」という形で説明されています。そういったものは比較的早く教科書に入ってくるのですが、なかなか新しい説が反映するのは時間がかかるというのは、感じてはおります。補足というか、補足にもなりませんけども、そんな感じです。

中尾 いろいろな問題があるかと思うのですが、私は、やはり布教する側が、日蓮宗であるならば日蓮聖人のイメージをしっかり持たなくてはならないのです。どなたかがイメージを作って、そのイメージを借りて説明するのではなくて、自分のイメージを自分の文章で書いてみる。一冊本を書く必要はないので、例えば「日蓮聖人について自分ならこう言う」ということを、原稿用紙三枚でもけっこうだから、きちっと書いて、自分の一つの根拠として持つことができる必要じゃないでしょうかね。

そのときに、自分は客観的な日蓮聖人をどう考えようとしているとか、先ほど高橋先生がおっしゃったように、客観的ということはいろいろ難しいことがあるかと思えますけれども、あるいはそうじゃなくて、自分の心の中にある日蓮聖人の像を描いてみるとか、そういう営みは、しなきゃいけないんじゃないかと思っております。そういうもの

があつて初めて、日蓮宗の教師としての次の一步が踏み出せるのです。正直なところ、今、日蓮聖人の全体像というものが、どうも描き切れてないんじゃないかならうかと考えております。いかがですか。

蓑輪 ありがとうございます。日蓮聖人をどのような人物として理解するのかという、一番根本的な問題を突きつけられたような気がいたします。それも、人が描いたものではなくて、自らが描いていかなければいけないというのが、中尾先生のおっしゃられたことだと思います。「自ら考えよ」というところが、なかなかには厳しいご指摘ではないかと思えます。各自が、日蓮聖人のご遺文やその当時の時代状況などを通してながら、「このような方であつたのではないか」という思いをきちんと描けるようになってくると、日蓮宗の未来というのが、また変わっていくのではないかと思います。先生、どうもありがとうございました。

それでは、いただいた質問を、パネリストの方たちに答えていただけたらと思っております。

最初に高橋先生に宛ててなのですが、「鶴岡八幡宮の神道的機能と、人々のそれに対する受容をお教えください」とあります。「仏教と同等のものとして、日蓮聖人はじめ当時の人々の認識があつたのでしょうか」という質問が来ています。八幡宮寺といひまして、いわゆる宮寺（みやでら）という名前で呼ばれるのですけれども、神社であり、かつ寺院で、どちらかという寺院のお坊さんたちが運営の中心を占めていたといわれているのが鶴岡八幡宮寺なのですが、神社、神道的な機能はどういうものであつたのかということですが。

高橋 なかなかこれは難しい質問でございます。言い訳じゃないのですが、昔のことを調べる場合に史料に頼って考えていかなくちやいけないのですけれども、鶴岡八幡宮に関しては、ほとんど仏教関係の史料が中心になっていまして、もちろんお坊さんだけじゃなくて、神主さん、神官の方もいるのですけれども、お坊さんよりも身分が低

い形で位置づけられておりまして、なかなか活動が見えにくいところがあります。

そうはいつても、神社でもありますので、神事ですよね。神様に対する行事というのは、毎年毎年、もしくは毎月毎月っておりますので、そういったものは確認できますけれども、仏教の役割に匹敵するような神社の機能というのは、正直、鎌倉時代には、中世には見えにくいというお答えしかできないかなと思っております。申し訳ございませんけれども、私の答えられる範囲は、以上になります。

菘輪 ありがとうございます。鎌倉幕府の神社に対するものとしては、鶴岡八幡宮よりも、二所権現さんの箱根神社とか、伊豆山神社ですかね。あちらの方がすごく有名な感じがするのですけれども、具体的なところは、幕府による加持祈祷を神社にお願いしていたということですね。具体的に神社にお願いする加持祈祷は、どういうものをお願いしていたのか、すぐ思いつきますか。

高橋 基本的には、国土安穩という形ですね。毎年毎年、もしくは毎日毎日が安全に暮らしているようにとということと、もう一つは、地震とか災害があった時ですね。そういうときに神様にお祈りする。これは、非常に大々的にやります。ただ、それも、これはなかなか中世らしいのですけれども、神社単独でやるわけじゃなくて、神道のお祈りもするし、同時に仏教のお祈りもするという形で、両方でやっているという感じがしております。

中尾 つながるかどうかわかりませんが、私は、幕府の一つの仏教に対する理想型があるんじゃないかと思っております。それは、あくまで修行仏教であって、建長寺・円覚寺のように一つの僧房に籠もって、そこでお坊さんが修行して国土安穩を祈る。従って、その枠を超えて動く僧侶というのは、許せない。そういう価値観があるんじゃないか

ないでしょうか。

それは、古代仏教も基本的にはそうじゃないですか。あくまで出家仏教で、日蓮聖人の宗教も、そういうところが基本的にありますよね。例えば、『立正安国論』を北条時頼のところにお出しになったわけですけども、それは、日蓮聖人の出家仏教的な考え方と、北条時頼の出家仏教への志向というものが一致したからじゃないでしょうか。

『立正安国論』は北条時頼のところに出すべくして出されたと考えているのですが、そういう仏教の世界観というものを枠に考えなくちゃいけないのです。日蓮聖人の当時、幕府から仏教を統制する法令が出されています。例えば夕方になると浄土の僧が馬に乗って信者の家を訪れるのを禁止されていて、民衆仏教への圧力を感じます。鎌倉の宗教を考える時には、幕府の宗教政策というものを、日蓮聖人の思想・行動と併せて考えなければいけない。

そこで、一つ先生にお伺いしておきたいのですけれども、われわれは、日蓮聖人が幕府に『立正安国論』をお出しになったということをあつちこつち言うわけですよ。幕府のために迫害されたと言うのですけれども、幕府というのは、一体どう考えたらいいんでしょうかね。単に幕府のために法難を受けたと言っただけでも、果たしてそうなのかどうかという問題は、ございませんか。

高橋 ちょうどその話は蓑輪先生と休み時間にしていたところでした、龍ノ口法難で、それは史実じゃないという説もあるみたいなのですが、多分私は史実であろうとは思っているのですが、ただ、幕府が一介の僧侶を処刑するというのは、ちょっと考えにくいところがあるんですね。

ちょうどこの時期はモンゴル襲来とかぶつていまして、モンゴルから使者が何人かやってきますね。確かに龍ノ口ではモンゴルの使者も処刑しているんですが、しかし、処刑するのは、文永の役のあとにやってきた使者なんですね。最初の文永の役の前にも何人も使者がやってきていますけれども、全部追いつ返すんです。処刑はしないで。文永の

役の直後に、当時のフビライ・カーンがまた使者を送ってくるわけなんです。それを斬っちゃうんですね。斬っているんですけど、そういう形でかなり時間がかかっていますし、しかも、龍ノ口の法難よりかなり後のことなんです。それに比べて、異常に龍ノ口の法難が早い感じがしますので、ちょっと幕府の対応としても異常な感じがする

と。

考えていくと、もしかしたら中尾先生がおっしゃった話ともつながってくるのかなと思うのは、幕府といっても、まさに現代の政権みたいな形の一枚岩のかっちりした、司法体系もかっちりした存在ではなくて、いろんな人間が勝手に動く側面があったんじゃないだろうか。当時、執権に次ぐナンバーツーに「連署」っていう地位がありますけども、連署を長らく勤めていた北条重時。それから、その息子で、北条時頼のあとに執権になった長時という有力な親子がいるのですが、これが熱烈な念仏の信者なんです。これは日蓮聖人の遺文にも書いてあるとは思っていますけれども、この重時と長時の親子、もう重時は死んでしまっていますけれども、長時が非常に日蓮のことをいじめるを書いてありますので、幕府の中でも一部の人間が先走って日蓮に対して攻撃を加えたんじゃないか。

そういう意味で言いますと、「幕府」という言い方でくるのは、まさに中尾先生がおっしゃいますように、適切ではないんじゃないかなと、もう少し幕府の方も腑分けして見た方がいいんじゃないかなという感じは、この間、話を考えていて、また、今日のお話を伺った上でも感じてきている次第です。

襄輪 ありがとうございます。質問からいろいろと派生しながら議論になりました。よく私たちは幕府に諫暁したというように言いますし、幕府が組織として日蓮聖人に敵対していくというような印象を持つこともあると思うのですけれども、現実、もしかしたら違う形ではなかったかというところではないかと思えます。

それでは、次の質問なのですけれども、大塚先生に一つ来ております。「政治家としてご活躍されている先生から

見て、また講演等を行う中で、今、国民が仏教に対し何を求めていると感じられているか、教えていただけませんか」という質問が来ております。

大塚 重要なお質問です。まず実感から申し上げます。カルチャーセンターで仏教講座を持ち始めて五年目になります。皮膚感覚的に申し上げますと、仏教に対する関心は高まっています。受講者も増えています。

プロフィールに記しましたが、過去十数年間、中央大学大学院の公共政策研究科で修士論文の指導をしていました。学生数の減少で三年前に廃科になりましたが、公共政策研究科なので、何を研究テーマにしてもよく、楽しい大学院でした。十数年間で約七十人指導しましたが、その中で三人、研究テーマとして「お寺の現代的役割」を設定した学生がいました。

そうした学生と一緒に勉強していたことも、私の仏教趣味を深めることにつながりました。学生たちにとってそのようなテーマを設定したのかを聞くと、ほぼ同様に、現代社会には様々な問題や不安があり、「お寺が何かの役割を果たしてくれるといいなと思って」という反応でした。素朴な動機ですが、指導教員としては「なるほどなあ」と思われました。

若者なりに社会に対するいろいろな不安とか、困っている人たちのことを考えている中で、「昔のお寺はそういう場合に人々を救っていたと聞いているが、現代ではあまりそういう話を聞かない。お寺の役割が復活すればいいの」という気持ちを抱えていることを知り、新鮮でした。もちろん、今でもそうした役割を果たしているお寺もたくさんありますが、学生たちの素朴な問題意識に触れて、仏教趣味人として嬉しく思いました。

公共政策は森羅万象を対象とします。ほとんどの分野が、何らかの法律、制度、政策に関係していますが、公共政策の手が回らない分野、カバーし切れない部分を、お寺や僧職の皆さんに、どのようにフォローアップしていただ

るのか、何らかのサポートをしていただけなのか、学生たちはどのように考えていたようです。

こうした経験を鑑みると、仏教やお寺の今日的役割はまさしく重要な論点です。早稲田大学の学部の授業はまだ続けており、もう十六年目になります。教えているのは経済学ですが、毎年、学生たちに次のような質問をします。

「人間は地球上で一番優れた生物であるか」ということです。そう思う人に拳手を求めると、大勢が手を挙げます。そのうえで、次のように問いかけます。

地球上の生物の中で、人間だけが、言語、科学、文化、宗教を持っている。一番優れているように思えるが、よく考えてみよう。ミミズをカエルが食べ、カエルをヘビが食べ、ヘビが鳥に食べられ、その鳥も猛禽類の王者のワシに襲われ、ワシは寿命が尽きて屍になればミミズの餌なるという食物連鎖。他の生物の命をいただくのは生物の宿命ではあるが、生きるため以外の目的で他の生物を殺すこと、例えばハンドバッグにしたり、あるいは、絶滅するまで他の生物を獲り尽くす、殺戮する、言わんや同種同士で殺し合うのは、地球上の生物で人間だけだ。

人間同士の争いごとにはだいたい豊かさをめぐって起きる。だからこそ、言語で話し合って争いごとを避ける。科学技術で豊かさを生み出して、争いごとを避ける。文化で心を滋養して、争いごとを避ける。宗教は平和のために存在するので、宗教の力で争いごとを避ける。そのために神仏が、人間だけに言語、科学、文化、宗教を与えたにもかかわらず、人間は、言語で罵り合い、科学で殺戮兵器を作り、芸術品を奪い合い、他民族の文化を否定する。今でも宗教をめぐる戦争をする場合もある。こんな愚かな生物はほかにいないような気がする。と、そこまで話してもう一回「地球上で人間が一番優れた生物だと思う人、手を挙げて」と聞くと、手が挙がりません。

仏教の役割は、こういう時代だからこそ「人間とは何か」ということを考える糸口になってほしい。カルチャーセンターの受講者は中高年が多いですが、自分の人生を振り返り、そういう迷いとか思いを抱いている人が多いようです。社会の不安要素が多くなれば、そういう思いを抱く人が増えるでしょう。ちょっと長くなりましたが、仏教の役

割は、こういう時代だからこそ重くなっていると感じています。

襄輪 ありがとうございます。社会の要求や、動きがあるときに、私たち仏教者がどう応えていくのか、どう手助けができるのかというのを、しっかり考えていかなければいけないことだと思います。「人間とは何か」というのは、哲学の中でも一番根本といえますか、最初に出てくるテーマだと思いますので、それをいつも心のどこかに持っていないと、なかなか回答が出てこない。また、その回答も、一つには限定されないうですね。正解があるのか、ないのかも分からないような部分もあると思いますけれども、大事な視点だと思います。

それでは、次の質問です。「四箇格言の他に南都無得道というのがありました」という質問が出てきています。これは意味を聞いてらっしゃるのかなと思うのですが、誰宛てとも書いてないので、私が答えたいと思います。今日の講演のときに、經典の講説とか法会というのが大変盛んに行われて、かつ、論義という仏教教理の論争というのが当時の仏教者たちの営みとして存在していたとお話し申し上げましたが、それと大きく関わると思います。

院政期ぐらいからと考えられているのですけれども、お坊さんの世界に、職掌というのでしょうか、仕事によって階層ができ上がってきます。「学侶」という名前前で呼ばれる人たちが仏教界の頂点として考えられていました。学侶系のお坊さんたちの営みとして一番大切なものが、經典の講説や、論義という仏教教理に対する質疑応答でした。南都の興福寺で活躍をした解脱房貞慶の史料の中に、一日の時間の過ごし方を残している史料がありまして、朝起きてから、学問。それから、朝勤ですね。終わってから、また学問、学問というような感じで、一日がほとんど学問で過ぎていつている人たちがいらっしゃいました。

この方たちが学侶の方たちで、勉強を中心にしていて、悟りを得るための修行というのがほとんどできていなかったのではないかとはいわれたりもします。とにかく学問的な研鑽に時間を費やしていました。でも、一方で悟りとい

うのがどういふものかといえ、いろいろと問題はあるかと思うのですけれども、奈良の伝統では、基本的に念仏を唱えることや、真言の実践や唱えたりすることが悟りにつながっていくという理解が存在していました。ところが、そういう修行的なものが、学侶系のお坊さんたちの場合には、時間的な制約もあって、ほとんどできていなかったであろうといわれています。

しかし実際に中世の十二世紀の後半ぐらいから、禪が紹介されるにつれて南都でも変化は起きました。学侶系のお坊さんたちから、遁世をして修行をする人たちが結構登場してきます。その修行の中にはどういふものがあったかという、これは法相宗の中ですけれども、「弥勒教授の頌」を唱えるというものがあります。「観影唯是心」という言葉を念仏のように繰り返し唱えていくというような行法が出てきます。その他にも、いろんなものがあって、実際に悟りに向けての行というのが復興されていくのが中世の時代でもあります。

ただ、学侶系のお坊さんに焦点を当てて、講説や論義を中心に行っている、出世を目指していたお坊さんたちにとつては、恐らく南都無得道でありまして、そこからは悟りを得ることはできないと。学問的な研鑽をしている人たちは悟りはなかなか難しいということだと思えます。ちょっと反省させられてしまうのですけれども、南都無得道というの、確かに存在していたのではないかなという気がいたします。

最後に、今日のテーマは、教科書をめぐってでございました。質問の中に、「教科書での日蓮聖人の記述は、具体的にどのように変更されるべきとお考えでしょうか。そのように教科書を改めるには、どのような行動が必要でしようか」という総括的な質問がありますので、これを最後の質問にしたいと思います。祖師の記述を改めるということ、現実には浄土宗の例で生じておりますけれども、実際に日蓮宗のときに、どのように変えるのが望ましいのか、どのように変更されるべきでしょうか。

それぞれのお立場からでかまいませんので、どのように変更されるべきか、そのためにはどのような行動が必要か

というところで、既にある程度答えは出ているかと思うのですけれども、もう一度確認の意味も込めて、先生方にお聞きしたいと思います。それでは、高橋先生から一言お願いできますでしょうか。

高橋 先ほども申し上げましたように、なかなか教科書を変えるのは時間がかかるなという感じがしますし、実際に今、教科書については別の問題も抱えています。授業の数も少なくなっていますので、「分量を減らせ、減らせ」って言われているんですね。むしろ削る方向をこれから考えなきゃいけないのが現実的なところですので、簡単に変えられるかどうかということは分からないのですけれども、いずれにしても、何が日蓮聖人にとって大事なことなのかを突き詰めていくことが大事だろうなと思うんですね。四箇格言が独り歩きしていることは間違いないわけでありまして、そこは正さなきゃいけないわけなのですけれども、それは別として、日蓮聖人にとって何が大事なことかということになります。

それともう一つは、やはり教科書でありますので、先ほど中尾先生が教科書に文脈があるということをおっしゃいましたけれども、教科書は一人一人の個人にスポットを当てるような文献ではありませんので、流れの中で位置づけなきゃいけない。とすると、「日蓮聖人のここが大事で、これはその時代のどういった文脈につながってくるから、大事だ」とか、もしくは前後の時代、特に後の時代の展開にどういうふうに関係するのか。そういうところをきちんと明確にしておくことが大事なのかなと思っております。私は以上です。

中尾 あの記述を変えることでしよう。なかなか難しいと思います。というのは、教科書は、どこへ言ったからいっぺんに変わるといふものじゃありません。あくまで検定することであって、国定じゃございませんので、幾ら政府の方へ言っても、「じゃあ、変えましょう」というわけにはいかないと思います。最近の問題でしたら、慰安婦の問題

だとか、いろいろございますね。それなんかでも、政治の方で「書くな」と言ったり、「書け」と言ったりしても、それは直では通用しない。表現の自由だとか、いろいろ憲法の問題もありますんで、難しい。ですから、私は一言で言って、このままでは不可能だと思います。ただ、問題は、長期間かけて考える必要があると思うのです。

例えば、法然だとか親鸞についての話ですが、法然上人について申し入れがあったようです。それは、法然上人が専修念仏の意見を出された。そして、親鸞がそれを踏み越えて、一念の念仏を考え始めた。教科書の記述によりまして、法然が専修念仏を唱えて、それを踏み越えて親鸞がいたと、そういうような記述です、今のところ。それはおかしいのではないのかと。知恩院の門主が伊藤唯真師、仏教史学者で昔から話をしていまして、その申し入れをしたと思うのです。申し入れは政府にしたわけじゃない。「こうあつてほしい」という意見を、複数のところに出したように聞いております。

そのように、日蓮の記述を変えるということにつきましては、ある一か所にばつと言つて、それがすぐ聞くということではございません。一番近道というのは、まず日蓮宗の人たちが、「日蓮という方は一口に言つてこういう人だ」ということを、はっきり概念を出すことだと思います。それがなくて「けしからん、けしからん」と言うだけでは子供の使いになってしまいますので、どのように変えるべきか、それは日蓮宗信者が自分で考えなきゃいけない。特に宗門の教師は、ふだんの行動理念でもございますので、早急にやらなくちゃいけないんじゃないかと思うのです。ですから、変えるということは非常に難しいんですけども、もっと難しいのは、自分はどうのような日蓮聖人のイメージを希望するのかという、自分の日蓮像というものをまず考えていかなきゃいけないんじゃないか。

しかし、なかなか大変な問題で、先ほど申しましたように、神話の問題だとか、客観的という問題、たくさんございますので、それはやはり時間をかけて、みんなで話し合つていかなきゃいけないんじゃないかと考えます。

大塚 今日では貴重な機会をいただきまして、ありがとうございます。どのように変えるか、どうやって変えるかという点について、簡単に感想を申し上げます。高橋先生がおっしゃるように、教科書がだんだん薄くなっている中で、鎌倉仏教の説明にかなりの頁を割いて、日蓮聖人についても十分に書き込むというのなかなか難しいと思いますので、例えば、次のような記述になればいいと思います。第一に鎌倉時代には庶民の困窮に目を向けた新しい仏教が生まれた。第二に、主な祖師は六人である。第三に、中でも庶民の出身であった日蓮聖人はより具体的に人々の苦しみに向き合おうとした。このぐらいの表現で、ある意味十分かもしれません。教科書における記述や、カルチャーセンターを受講してくださる一般の方々に、ことさら日蓮宗と他宗の違いを強調したり、四箇格言という言葉わざわざ説明する必要はないかもしれません。どのように変えるかという点については、限られた時間内で話し得ること、イメージできることは、このぐらいかなと思います。

どうやって変えるかという点については、中尾先生がおっしゃったように、宗派としてどういう主張をされるのか、どう変えたいと思うのか、ということが重要だと思います。望まない限りは、自然には変わりません。

いよいよ本当に変えらなったら、仏教界全体の中でコンセンサスを形成しておく必要があるかもしれません。仏教界の中の力学は私には分かりませんが、コンセンサスを得る必要がある場合には、根回しのようなことが必要かもしれません。そのうえで、各教科書会社に対する説明やロビー活動のようなことも必要かもしれません。

最後に整理しますと、変えてほしいという宗派としての主要や要望が、史実や史料に基づいていること、かつ、日蓮聖人を説明する象徴的な言葉として四箇格言に代わるもの、例えば「こういうものもありますよ」というような代替的な内容が用意されていること、などが重要だと思えます。短時間の中で申し上げられることとしては、このようなことかと思えます。

「**衰輪**」 どもありがとうございます。実際に教科書の記述を改めていくというのは、なかなか困難が予想されるところでありますが、大切な点をまとめてみますと、史実に基づいた日蓮聖人像を私たちがしっかりと持つところから始まっていくのではないかと思えます。具体的に教科書の記述を改めるというのを念頭に置いたら、そのためにしなければいけないさまざまなコンセンサスを得るための努力というのも、必要であるということではないかと思えます。

つまり、私たちが、日蓮聖人に対するイメージ、どういう日蓮聖人像を持つかというところが、最終的には日蓮宗の未来につながっていくのであるということを確認いたしましたして、討論の時間を終わりにしたいと思います。